

# 良寛さんはこんな人

(ふるさとに残る逸話より)

良寛が今もなお、ふるさとの人々に愛されているのはなぜだろう。その人柄を示す逸話が語り継がれているからでしょうか。



## 出雲崎

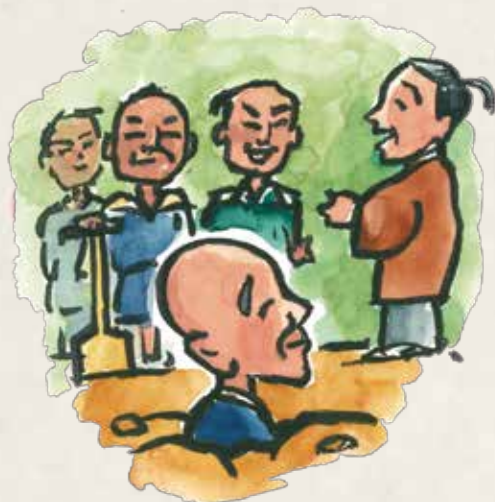
### ◆本の虫良寛の少年時代

少年時代の良寛(采蔵)は、読書が大好きだった。  
ある年のお盆の夕方のこと。毎晩、本を読んでばかりいる采蔵を心配して、母親が声をかけた。「たまには外に出て盆踊りでも見てきてはどうですか」  
その声におされるように采蔵は部屋を出た。  
しばらくして、母親は庭の石灯籠の陰に怪しい人影を見つけた。すわ泥棒かと薙刀を構えて近づくと、それは石灯籠の灯りを頼りにして、論語を一心に読む采蔵の姿であった。

## 寺泊

### ◆無欲な良寛のこころ

越後に帰郷したばかりの良寛は、寺泊の郷本の空庵を借りて住んでいた。  
ある時、浜辺の塩焚き小屋が火事になり、犯人と疑われた良寛は、村民に生き埋めにされそうになった。  
そこへ通りかかった夏戸の医者小越仲民のとりなしで、良寛は命を救われた。良寛を連れ帰った仲民は、生き埋めにされそうになっても恬淡としている良寛に「なぜ、なされるがままに黙っているのか」と問うた。  
良寛は「どうしよば、皆がそう思いこんだのだからそれでいいではないか」と答えた。



## 分水

### ◆良寛月見の松

江戸の儒者亀田鵬齋が文化6年から3年ほど越後を訪れたときのこと。  
ある秋の晴れた日、鵬齋が良寛のいる五合庵を訪ね、良寛は鵬齋の好物である酒を買いに出た。  
ところが、いくら待っても帰ってこない。鵬齋が山路を下り迎えに出たところ、五合庵のすぐ近くにある松の根元に良寛が腰をおろして、こうこうと照る月を眺めているではないか。  
「良寛さん、酒は・・・」と声をかけると、「月があまりにもきれいなので見とれていたところだよ」と言い、あわてて酒を買いに行った。



## 与板

### ◆ほたるの良寛

父・以南の生家がある与板の和泉屋山田家の主人杜臯とは趣味の俳句等を通して親交があり、良寛は時々山田家に通っていた。  
家人には気の許せる『およし』という女性(一説には杜臯の妻)がおり、夕方になると決まって訪ねてくるので、良寛を『ほたる』だと冗談を言いながら酒を振る舞った。  
良寛はそのおよしを妹のように可愛がっていたと伝えられる。良寛に次の歌がある。  
**寒くなりぬ 今は蛩も 光なし**  
**黄金の水を 誰か賜わむ**  
**草むらの 蛩とならば 宵々に**  
**黄金の水を 妹たまふてよ**

およし宛書簡三種には互いを気使う、ほのぼのとした逸話として伝わっている。



## 和島

### ◆貞心尼との出逢い

貞心尼が良寛と初めて逢うことができた秋の日、二人は夜を徹して語り明かした。  
世が更けたので良寛はこう歌った。  
**白妙の衣手寒し秋の夜の**  
**月半空に澄み渡るかも**  
(袖のあたりが寒くなり、秋の夜も更けてきた、月が空の中ほど上り、澄み渡っている)  
それに対して、貞心尼はまだ話したい気がして、こう歌って答えた。  
**向かひゐて千代も八千代も 見てしがな**  
**空行く月のこと問はずとも**  
(向かい合って、このままずっと良寛さまのお顔を見ていたいです。空を行く月のことなど気にしなくてもよいではないですか)

